

遊里図帖

折本装一帖

紙本著色

本紙寸法（縦×横cm）

- ① 二三・五×三一・五
- ② 二三・五×三一・八
- ③ 二三・二×二三・五
- ④ 二三・五×三一・八
- ⑤ 二三・五×三一・九
- ⑥ 二三・五×三一・八

京都 角屋藏

江戸時代初期の制作にかかる遊里を描いた画帖を紹介する。

全部で六図からなる本画帖は、基本的にはすべて、男女が遊んでいる遊里の中のある一室とそれに続く庭、という構成をとる。以下にそれぞれの描かれた内容を列挙しておこう。

第一図は、双六に興じる男女。遊女が三名で、男は前髪立の若者がふたりと月代を剃ったやや年かきの者ひとり。庭には松。踏石の上にて下駄。

第二図はかるた遊びで、廊下には茶を運んで来た禿が立っている。

第三図は、玄関風のところで煙草盆を囲んでいる男女で、うちひとりの遊女は柱にもたれて手紙を読んでいる。襖には水墨による楼閣山水図がいかにも達者に描かれる。

第四図は酒宴の場面。無理矢理に女に酒を飲ませようとする男な

ど、遊里図にはおなじみの光景である。障子の腰には、第三図でも見られた水墨による楼閣山水図が描かれている。濡れえんの傍に巨きな自然石が置かれる。

第五図は庭を広くとって輪舞に興じる男女を描く。襖には、例によって水墨山水図。

第六図は音曲。若衆が琴を弾き、三味線をつまびく女（垂髪の幼童？）もいる。

総じて、画風はおだやかで、筆墨・彩色ともに丁寧さをいささかも失わず、敢えていえば「都ぶり」の遊里図の典型的作例ということになるか。寛永最末期の制作かとされる「川口遊廓図」屏風等のもつ猥雑さから程遠いというべきであろう。

ところで、この画帖はその装幀の様子から比較的近年になって仕立て直されたことが歴然なのであるが、それにしても各図の寸法がまちまちであるのが筆者には最初から不審であった。さらに、その人物描写や第六図の庭の木（榎か？）には確かに見覚えがあり、手元の図録類を繰っているうちに、これとまったく同じ画風を示す作品に行き当たったのである。それは、東京芸術大学の『蔵品図録』の「絵画I」に収載された「風俗図屏風」（図版番号61・62）にほかならない。

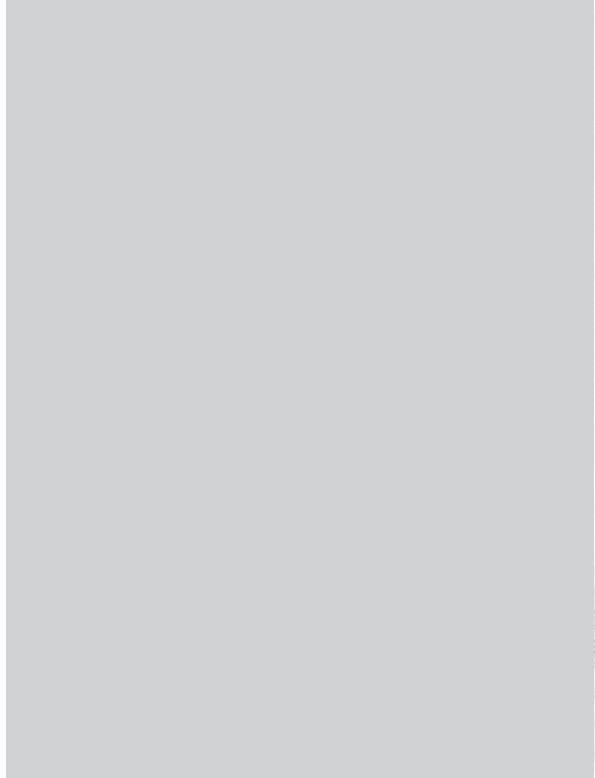
芸大本は六曲一隻の押絵貼で、全図で六図からなる。その図版解説（山川武氏による）に「屋根を吹抜きにしないで、室内が覗ける程度に俯瞰的な構図をとり、建物は図学でいう斜投法の手法で整然と構成する」と説明されている事柄は、先に述べたごとく本画帖の基本構成をなすものと一致する。それより何より、人物の表情が酷似していることが、芸大本屏風と本画帖の密接な関係を明らかに証明してい

るであろう。本画帖の第六図の樹木と芸大本の部分図に見える樹木の描写が一致するのみならず、塀・手水鉢・欄干・襖・障子等の表現、庭におかれた自然石の描法も同一である。そして、芸大本屏風と本画帖のより有機的結びつきを示すのは、「画中画(室内襖絵)に友松風の瀟湘八景らしい山水図が描かれている」という点である。

かく見れば、本画帖が六図によって構成され、寸法もそれぞれまちまちであることの意味は、これが本来は六曲一隻の屏風であって、

破損を漸くまぬがれたその主要な部分を切り取って画帖に仕立て直したものであることを示すものでなければならぬ。画帖の画面にのぞく金砂子をまいた雲形が両者において共通することから考えると、如上の一致点をも勘案して、芸大本と本画帖はもと一雙をなした屏風であった可能性がはなはだ高くなるのである。

そして、この推測を決定的にするのは、本画帖の第五図においてみられる水のしみ跡と芸大本にみられるそれとの一致である。



芸大本には「岩佐勝以筆」の伝称があるとのこと、解説がそれを否定しているのは妥当だが、制作年代を「寛文前後」とするのはいかがであろうか。筆者は、「男女の面貌は品よく、涼し気で、衣裳の色どりも美しい」ゆえに、寛文美人的粗雑さにまだいたらない頃、少くとも寛永末期ごろまであげてみたいと思う。

（付記）本画帖の第六図と芸大本に共通に出て来る特徴のある樹木表現は、職人尽図のどれかでも見た記憶がある。資料をあたってみたが見出せない。御教示願えれば幸いである。

（狩野博幸）



图1 角屋本

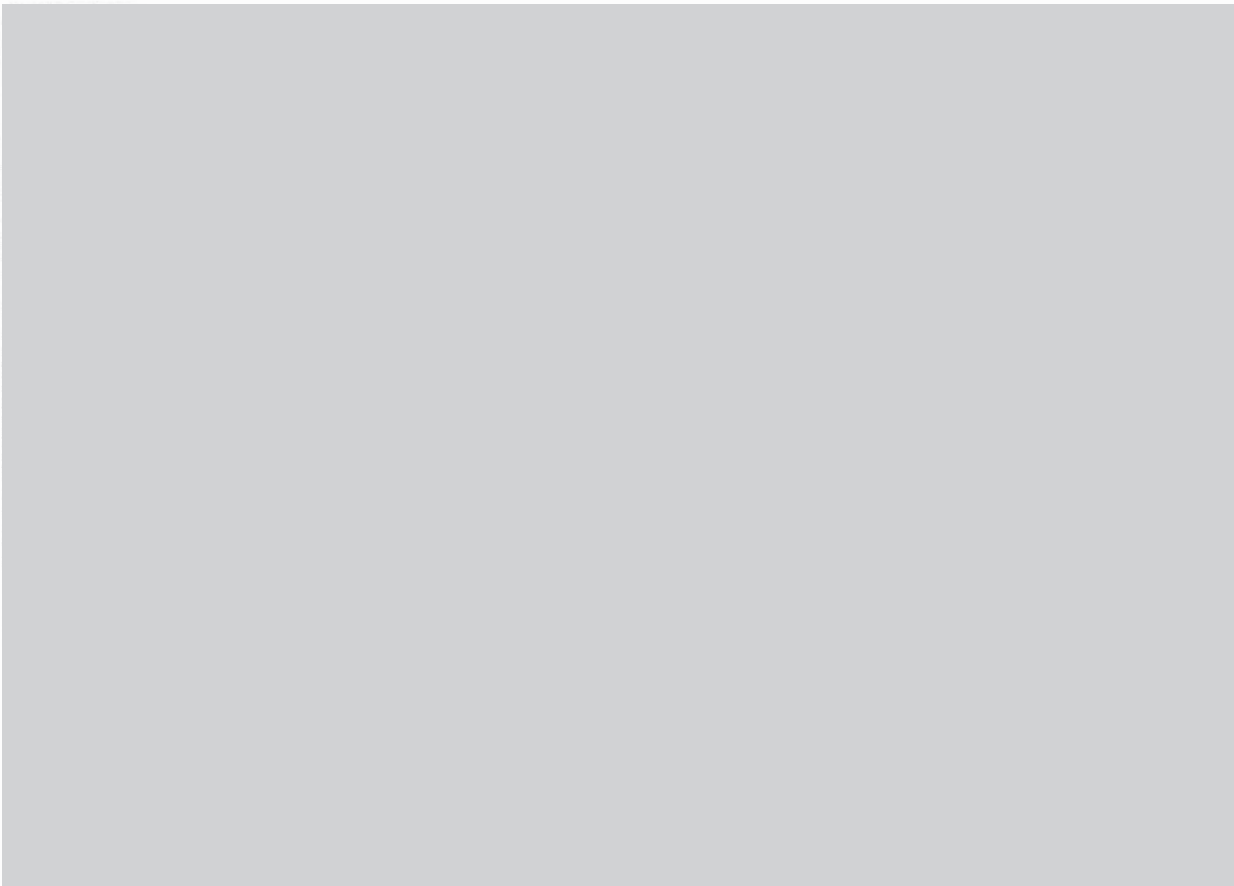


图2 角屋本



図3 角屋本

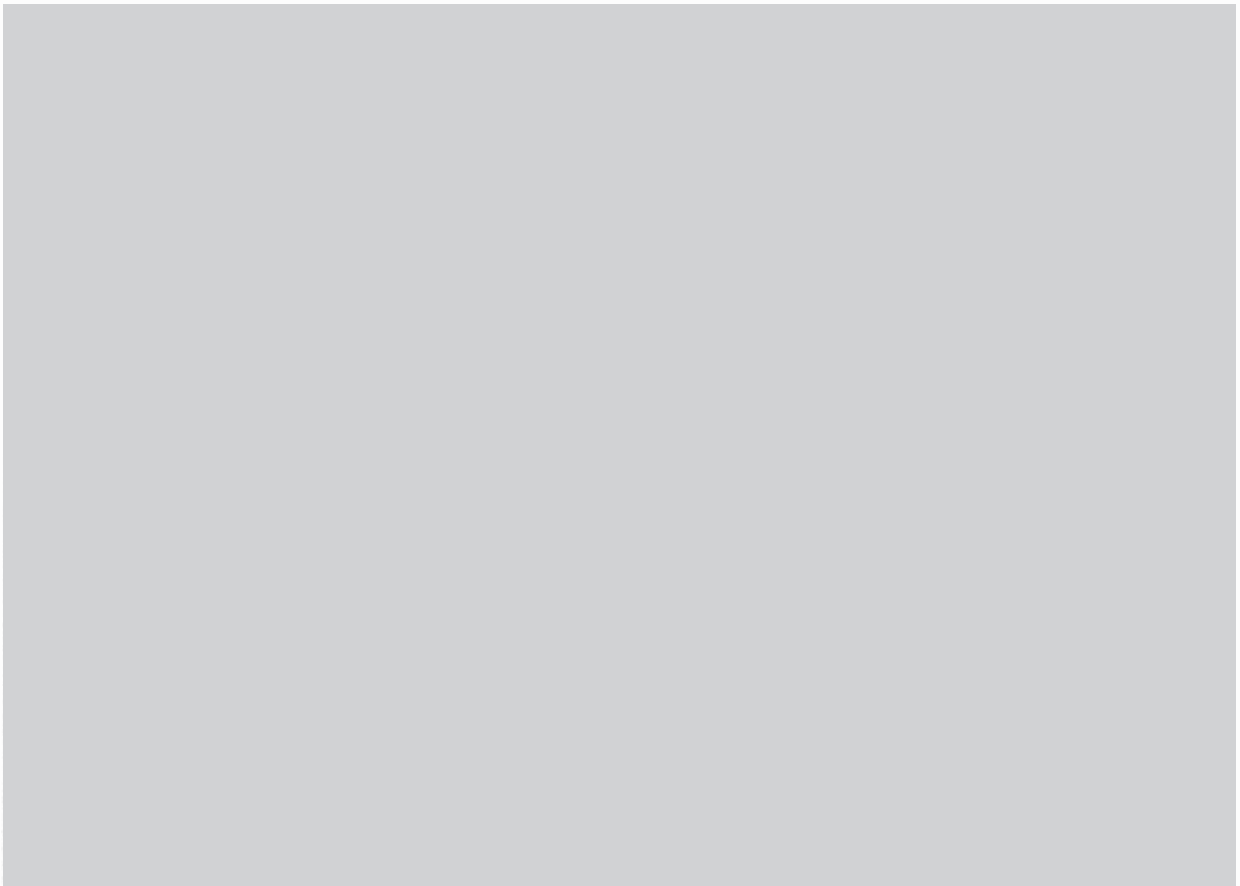


図4 角屋本



図5 角屋本

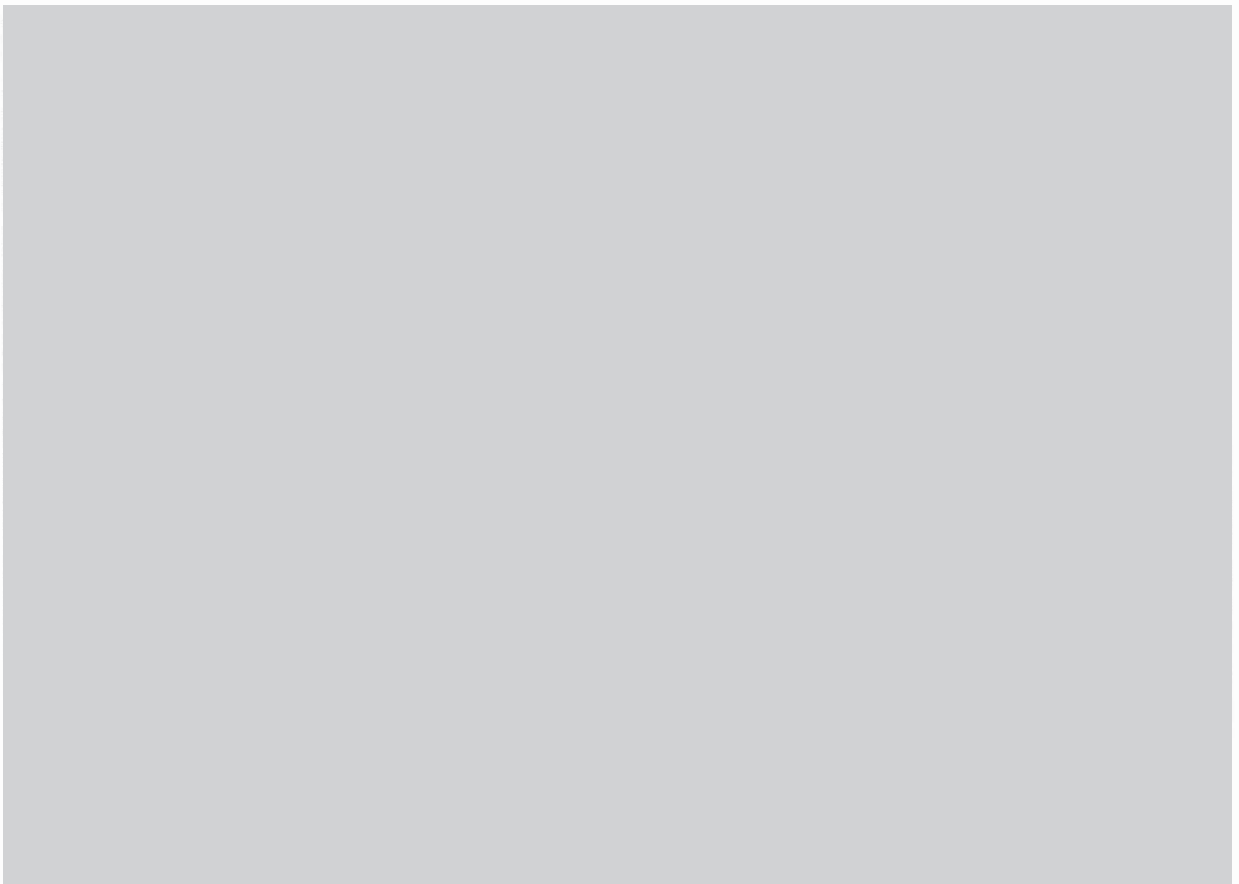


図6 角屋本